

「色」の活用は、児童の地域感をいかに高めるか：防災教育の視点から

照山龍治(研究会代表、2011 年度県地域防災計画再検討委員長)*、木村典之(県教委次長)*、幸野洋子(県幼児教育センター)*、山崎朱実(小学校教諭)*、宮里耕太(子どもと文化の研究者)*、塩月孝子(県芸術文化スポーツ振興財団副課長)*、秋田喜代美(学習院大学教授) *印は「地域の色・自分の色」研究会員

1.. これまでの研究活動

当研究会は 2014 年に立ち上げ、「色」を通して、地域の自然や歴史や文化に関心を向け、その仕組みや成り立ちを「色」の違いや変化から解き明かす活動を行っている。その中で、地域の「色」を見つける入門教材や、地域の「不思議」を、「色」の違いや変化から解き明かす探究教材、そして、地域と地域を繋いで、「地域特性」を確かなものにする学習材などを作成した。これらの教材は、幼稚園や小中学校、図書館、こども色博物館等に置き、ホームページに公開、交流授業も実施して、広く活用を促してきた。結果、令和 6 年度教科書「図画工作 3, 4 下」に取り上げられた。

2. 児童を取り巻く自然災害

今、日本の各地は、いろいろな自然災害に晒されている。例えば、30 年以内に 80% の高い確率で発生すると言われている南海トラフ地震や、活断層型地震や火山噴火、巨大台風などである。そして、大分県内のいたる所に、地震や津波、火山噴火など、多くの災害の痕跡が残されている。そのような中、2011 年度に大分県が行った東日本大震災の避難者に対する聞き取り調査では、「居住地の自然特性や災害史をもう少し勉強しておけば被害を軽減できたかもしれない」との意見もあった。

3. 大分県地域防災計画

東日本大震災で「防災教育の有無が子どもたちの生死を分けた」という事例を踏まえ、「学校と地域の防災教育が補完し合い、先人の知恵を受け継ぎ、県土の自然の特徴を理解しつつ高い防災意識を維持していく」、「児童も地域の一員、避難場所を理解させる」と記載されている。そして、東日本大震災の避難者からは、「小学校低学年の頃、地震の時、海の近くは津波が来るから高いところに逃げると教えられ、その記憶が地震津波から私を助けた」という証言もあったとしている。

つまり、「地域(自然や歴史や文化)への関心と学びが、自然災害から地域の子どもの命を守る」ということである。

4. 「色」の活用は、「地域への関心と学び」に有効か？

(1). 研究協力校(実践校)では

検証実践の中、授業に関心がなくクラスから外れていた児童が、「色見つけ」や「色調べ」など、学びに「色」を活用することで、地域の学びに意欲が出てクラスをリードするようになった。

(2). 都市部(別府市)の教育機関では

別府市の全幼稚園、全小中学校、市教委を対象に、研究会作成の教材「ふるさとのたからもの(色見付け)」と「ふるさとのふしぎ(色調べ)」を配布・学習の後に、アンケート調査を実施した。その中で、色の活用は、地域の学びに有効かという質問に対しては、22 幼・小・中学校等の内、14 校園等が「有効」、8 校園が「少し有効」と回答した。そして、授業づくりに有効かという質問に対しても、11 校園が「有効」、11 校園が「少し有効」と回答した。その結果、市教委主催の別府学職員研修に取り入れた。

(3). 離島・漁村部(姫島村)の教育機関では

別府市と同様の調査をしたところ、姫島村の幼小中学校園と村教委では、全て、「有効」と捉え、姫島小学校で検証実践を実施した。

5. 児童が捉えている自分の地域

(1). 現状と、実体験と学習による変化

別府市の象徴で彩り豊かな地獄(温泉)が校区に有る A 小学校と、無くて校区が隣接する T 小学校の児童に、自分の地域の色を聴取。結果、地獄が校区にある A 小学校の 67% の児童が地獄の色を地域の色とした一方、隣接校区の T 小学校で地獄の色とした児童は 13.6% のみであった。

地域の色を地獄温泉の色とした割合

学 校	A 小学校	T 小学校
割 合	67.0%	13.6%

つまり、小学校のほとんどの児童は自分の地域は自分の小学校区であり、たとえ、隣接校区に市の象徴というべきものがあったとしても、自分の地域のものとして見ていないことがわかった。

しかし、T 小学校も地獄染め(泥染め)などの実体験と地獄(温泉)を含めた広い地域学習を行うことによって 13.6% が、45%、83% と地域感は広がり、地獄を自分の地域のものとする児童の割合は増加した。

実践・学習経験による割合の変化

経験年	0 年	1 年	2 年
割 合	13.6%	45.0%	83.0%

(2). 地域間交流による児童の地域感の変化

別府市の地獄染めと国東市のシチトウイ栽培を両市の協力校が実体験・交流授業を行い。さらに、別府市の地獄染めと姫島村の拍子水温泉泥染めを実体験・学び合いを市村の協力校が行った。結果、関心がなかった相手の市町村を強く意識し始め、加えて、比べることにより自分の地域の特性を確かなものにした。また、質疑応答の中で知識不足を実感、国東と姫島で「地獄めぐりに行ってみたい」、別府で「シチトウイを育てたい」「姫島をもっと知りたい」など「さらなる学び」を希望するようになった。

6. 検証結果

研究協力校での実践と、関係市町村の教育機関に対するアンケート調査から、「色」の活用が、児童の「地域への関心と学び」に有効である可能性が示唆された。ここからは地域防災計画に記載された「学校と地域の防災教育が補完し合い、先人の知恵を受け継ぎ、県土の自然の特徴を理解する」という防災教育の在り方に「色」の実践が効果をもつ可能性が推察できる。加えて、「色」を共通テーマとした地域間交流は、児童の視野を広げ、地域間の互助・共助という防災意識を育む上で効果的な取り組みの一つになることが確認できる。そのため、児童の「地域の色への意識」が「防災意識」といかに繋がりを持つかについて、より精緻な検証が今後の課題である。

付 記 本研究発表は、一般財団法人日本児童教育振興財団令和 7 年度研究助成をうけて発表している。